楡の花散る学都にぞ理想のあとに憧憬れて 河呼青春の のあとに憧憬れて の夢高く

綺花を流して逝く水に ながなが の春を嘆くなり を求む若人は

四

牧** 場ば の ő の緑草踏み 駒に鞍置きて しだき

うち振る鞭の音も高 の大空を朗らか

白雲流れゆく手稲山静寒歌を歌ひつ眺むれば < か

を縫ひてゆく

銀^ゅ雪* 涯なく白き石狩のはてしるいとかり 疎林のほとり夕陽は落ちてゃり せ乍ら橇唄は 「に連なる曠野の静寂 さへも絶えし真夜に

の群の片影もなし 唆の蒼空に銀月冴えている きょっち 鐘の沈みゆき

落葉踏みゆく雄き子は 三年の絢夢に涙する 沈黙の原始に散りしける

北斗は遠 「妄なしふ Ŧi.

真実一路の迪恵ぬ 「意気」と「血潮」に生くる子のいき く七星清し の現世を見下して

瞳に燃ゆる紅焰は 永遠なる生命の証 なり

信 蔵 君 作 詇

児山 有村徹 君 作 Ж